戦後「新建築」誌にみられた建築家の住宅観

建築家の住宅論に関する研究

THOUGHTS ON HOUSING OF ARCHITECTS IN "SHIN-KENCHIKU"
AFTER WORLD WAR II

Study on housing theories of architects

奥山 信一*, 坂本 一成**

Shin-ichi OKUYAMA and Kazunari SAKAMOTO

The aim of this report is to illustrate what contemporary Japanese architects think of housing through study of their published articles.

It is the author's opinion that to design houses for architects is not only supply a dwelling but also make concrete their most important feelings about architecture in general, and architects express their thoughts of architecture through not only designing actual buildings (material practice) but also through written theories (language practice).

In this report the authors agree that the architectural journal is the most active field of intercourse for architectural expression. Housing theories in "SHIN-KENCHIKU" published after World War II have been compiled as data, "SHIN-KENCHIKU" is one of the most popular architectural journals in Japan.

At first, the contents of each theory was investigated, and next some comments such as the phrase "housing is a vessel of life" or "housing is a model of architecture" were extracted from each theory.

Then the meaning of those thoughts on housing were analyzed through the method originated by Kawakita Jiro.

Keywords : *thought on housing, housing theory, contemporary Japanese architect*
住宅論, 住宅観, 現代日本の建築家

1. まえがき—本論の目的

一般的に建築の設計者は、具体的な建物を設計することによって自身の創作行為を具現化し、また表現していると考えられる。しかし、その一方で、言語的活動、言い換えれば、さまざまな著述を行うことによって、建築家は多くの提案をしてきた。こうした建築家によるさまざまな著述は、建築の思考の枠組みを形成するうえで重要な役割を担っていると考えられ、これらに対する研究も数多くなされてきている。それらは概して、特定の建築家の活動に価値を見いだそうとする作家論的なもの¹⁾、あるいは歴史学を前提としたもの²⁾として評価されるが、建築家の言語的活動をそれ自体ひとつの創作行為であるという前提の基に、総体的あるいは相対的に³⁾検討し論じたものは見だし難い。

こうした視点を踏まえて、この研究では、建築家⁴⁾によって著された言説のなかから、つねに主な創作の対象

のひとつとしてとらえられていたと思われる住宅にかかわる論考（以下、住宅論⁵⁾とする）に限定し、それらの中でも現代のものを総体的あるいは相対的に分析検討することから、現代において日本の建築家⁴⁾が住宅をいかに考え、そしてとらえてきたのかを明らかにし、今後の建築家の言語的活動に対する新たな知見を得ると同時に、ここで行う建築家の言語分析の方法論を構築することをも目的としている。

具体的には、資料としたそれぞれの住宅論⁵⁾の内容が、どのような関心に基づいていたのかについて考察し、そのことを踏まえて、個々の住宅論において「住宅は生活の容器である」とか「建築の原型として住宅がある」など、住宅がいかなるものか、いかにあるべきかを直接的に言明している箇所を、建築家の住宅観⁶⁾として抽出し、そこで語られている内容を KJ 法⁷⁾をもとに分析検討している。

* 東京工業大学 大学院生・工修
** 東京工業大学 教授・工博

Graduate Student, Tokyo Institute of Technology, M. Eng.
Prof., Tokyo Institute of Technology, Dr. Eng.

「動向・状況」
「設計態度・方針」

「住宅産業」という言葉は、今や流行語の一つになってきていて、その状況は世界的なものである。そこで、日本の場合はいくつかの特殊な条件をもっている。まず、住宅不足と核家族化の結び付き、建築費、そして、新しい市場としての住宅産業という問題である。

しかし、それらの一般状況に対して建築家の反応は意外と鈍い。手のつけ方がわからないといった状況であろう。住宅不足は過去のそれとは違って、人間生活としての基本的住宅水準の確保という問題に変わってきている。そして、その裏づけとして、従来のエナジー主体の産業が、人間に直接つながった産業に変わってきたことがあげられる。つまり、従来は工業が住宅をつくるほど進歩していなかったのである。このことから、現在住宅産業が問題になっていることを、単に住宅不足解消のためとは考えられず、今までは、それらを進める要因が欠けていたのだとみることができる。

このような工業発達の中にあって、日本の住宅は値段の高さと質の高さで世界的になってしまった。そして、日本人のなかで、住宅というものの内容に関する共通イメージが崩壊してしまっている。住宅は生産的に崩壊していると同様に、機能的にも既に崩壊している。

「動向・状況」
「設計態度・方針」

こんな中で、住宅産業の波が押し寄せる現在、建築家はまったくといって良いくらい動いていない。

「住宅状況」
「家族制度」
「社会状況」
「生産方法」

図—1 住宅論の内容分析の例

表—1 住宅論のカテゴリー表

カテゴリー分類	カテゴリー項目	論文内容の要約の例	例文末尾の番号はここで抽出した住宅論NO. 矢印後には重複して含まれるカテゴリー項目を示した。
建築	「動向・状況」	建築界における住宅作品のあり方、またそれらの根底にある考え方などにふれているもの。「住宅設計は行き詰まったとされているが、現状は依然としてその変革期である。no28」→「設計態度」	
	「平面(プランク)」	平面をめぐる内容「すまいの設計の仕事が、各室を平面的に配列することにその目的をおくとする考え方からは、民家が限られた平面の中で多彩な変化を示しているその本質をとくことはできない。むしろ非合理的なものとされたこれにかわって提唱された戦後の新しい平面計画によるすまいの方が、リアリティが希薄である。no27」→「動向・状況」	
	「表現(デザイン)」	デザインをめぐる内容「最近の雑誌にのっている住宅作品には造形主義的傾向が強いものが多い。つまり外部のみがイメージされて彫刻化されている。no52」→「動向・状況」	
	「設計態度・方針」	建築家の住宅設計に対する態度あるいは方針にかかわる内容「(都市の大部分の建築家によって研究されているplanning methodは、その建築のつながる施主の階級性と表裏一体をなしており、一般的に進歩した方法ではない。)であるから、若い建築家は無批判にこれらの住宅の形式だけを新しい住宅のタイプとして受け取ってはいけない。no16」→「居住者」	
	「概念」	建築界において、機能主義などある特定の考え方として認められている概念や、近代主義建築などの歴史的な事実にかかわる内容、または建築家の個人的な観念の投影からでてくるとされる考え方にかかわる内容。「機能主義は結論的に近代主義であり、機能の分化が存在する。no11」“今、トボロジー(位相空間学)が新しい空間概念だと言われている。しかし、空間図形のあらゆる属性の中から連続性という性質だけを取り出して組み立てた幾何学が、そう簡単に建築空間の表現にはならないと思う。no54」→「動向・状況」	
	「空間」	建築の空間にかかわる内容。「建築は空間の構成であるといわれている。しかし一般に建築の形を問題にするときは文字通りの不動産の堅い部分だけをいうようであるが、建築というのはそれと同時に堅い甲羅の中のやわらかな雰囲気や空虚なemptyな空間のすべてを含んでいるno49」→「表現・デザイン」	
社会	「部分」	住宅の全体像にかかわるというよりは、ある特定の部分に対する言及。「現代住宅において常に台所は問題となり、新しい試みがなされてきた。そして、建築家は時おり過去の台所について回想するが、・・・とにかく家事労働の中心というより、むしろ住宅の心臓部を言い表してもいいほどよく利用され、より重要であった。no17」→「動向・状況」	
	「建築家の役割」	社会における建築家の立場とか役割といったことにかかわる内容。「現代の高度資本主義社会では、建築家にできることが社会的地平の中の点や線としてあっても、社会的地平を面的に傾斜していくような時代ではもはやない。no94」→「社会状況」	
	「居住者」	住み手の住意識にかかわる内容。「・・・施主の住意識もきわめてファッショナブルで、戦後日本人の特性である物信仰の信者達でもある。であるから住居のインテリアに女の家化の趨勢はやむことを知らないだろう。no72」→「社会状況」	
	「家族制度」	戦前の家父長制とか戦後の核家族化など家族のつながりに関する社会的制度にかかわる内容。「浜口によって切り捨てられた「家」という概念によるふたつの領域が象徴しているのは、必ずしも封建的な支配関係だけではなかった。・・・家父長を象徴する領域は家族の内部領域を守るための防御機構でもあったはずである。no101」→「住居形式」「概念」	
	「住居形式」	コートハウス、共同住宅など主に物理的な住居形式にかかわる内容。「個々の住宅から集団の住宅へと住宅形式の根本的な変革を行わなければならない。no9」	
	「生活方式」	「住居形式」が物理的な住宅のあり方にかかわる内容であるのに対して、「生活方式」は住み手の生活のあり方にかかわる内容である。「生活には物が必要であり物がなくては生活は成り立たない。そして、ここでの物とは人間にとって対立的な存在ではなく、人間と一体となって生活をかたちづくるものだ。no26」	
環境	「都市」	都市にかかわる内容。「都市はわれわれの欲望や夢の活性化をもたらしてくれる近代以降の空間であり、今日までの世界だといえないだろうか。no99」	
	「住宅状況」	住宅一般の社会における状況にかかわる内容。「現在の住宅団地等は均質化の方が目立ち、生身の人間が住んでいる実感が空虚である。no71」	
	「社会状況」	「現在の日本の国土では、残念ながら他人と無関係に勝手さまたまな住空間をもつことはできない。めいめい勝手な理想像に対して供給されている情報は限られており、それは商業主義の上に構築されたマスコミによるくだらぬイメージである。no55」	
	「伝統」	伝統にかかわる内容。「伝統にまつわりつく民族的感情のもつ無媒介性は、いろいろな現象の危険な母胎である。これが踏貫のときだけで終わるならばかまわれないが、創作とむすびつくとくに問題が発生する。伝統の評価は正しい認識によってのみえられる。単なる感情だけではえられない。no34」	
文化	「芸術」	芸術にかかわる内容。「生きるためだけの住居は真の住居ではなく、何等かのものが付け加えられなければならないとする考え方があり、これを芸術とか美とか呼んでいるが、これほど芸術から遠いものはない。また芸術はそれ自体が生きていく問題にふれていくものであり、他の目的と併置されるべきものではない。no21」	
	「その他」	たとえば、住居の発達史的問題と関わる内容など。「風土が生活の仕方を発見させるのではなく、むしろ多くの場合は生活の指向が風土を選ばせたのではないか。no50」→「生活方式」	
	「生産方法」	住宅産業などの住宅生産の方式にかかわる内容。おもに「社会状況」とのかかわりのなかで語られることが多い。「われわれの住宅設計の仕事は、どう考えても正当な建築生産というものからはずれていて、それによって社会の生産活動が変化すると考えられない。no38」→「動向・状況」「社会状況」「設計態度」	
	「技法・技術」	住宅の工法や技術にかかわる内容。「在来工法は、昭和30年代に新建材の利用や新施工法の採用により現在のようになったのであるが、それが工務店ごとにバラバラに行われた結果、性能そのものが非常に不安定になり、工業化以前の問題として、性能の安定が問題となった。no103」→「社会状況」「性能」	
生産技術	「材料」	材料にかかわる内容。「鉄が建築の主構造材につかわれ始めてから久しいのに、今だにそれが住宅の構造材として使われた例は数少ない。no20」	
	「性能」	性能にかかわる内容。「ここで問題にしなければならないのは、生活の恒常性の欠陥と住宅の耐用年数の増大との矛盾をどうするかである。no11」	

資料として、ここでは一般建築ジャーナリズムを現代の建築家の最も自由で活発な表現領域であるという前提のもとに⁴⁾、それらのなかで主要な建築誌のひとつと思われる「新建築」誌⁸⁾に発表された住宅論を、戦後から現代まで取り上げている。こうした資料に限定しているので、この報告で現代の建築家⁴⁾の住宅に対する言語的活動をすべて把握できたとは思えないが⁹⁾、上述したように同種の試みはなされてないことから、こうした研究をさらに深めるための最初の手がかりを提案するという点では、学術的研究の試みになりうると筆者らは考えている¹⁰⁾。

2. 建築家の住宅論

本章では、分析対象とした住宅論の内容を検討することから、建築家がどのような問題を住宅とのかかわりの中に見いだそうとしていたかを明らかにし、併わせてそれらの通時的な傾向についても考察する。

2.1 住宅論の内容

まず、ここで分析対象として取り上げた論文⁵⁾を要約し、それらがどのような内容について言及しているかを逐一 KJ 法⁷⁾に基づいて検討することから、いくつかのカテゴリー項目が設定できた。たとえば、図-1で示した住宅論の内容分析の例では、はじめに住宅産業の問題を日本における住宅不足と核家族化などのかかわりで述べた後、そのような状況に対しての建築家の対応について言及している。住宅産業の問題は、ある種の「生産方法」¹¹⁾が「社会状況」のなかで現象するものとしてとらえられ、また住宅不足、核家族化などは、それぞれ「住宅状況」、「家族制度」の一側面として、そしてそれらに対する建築家の対応は、住宅に対する「設計態度・方針」にかかわる問題として、それぞれ大枠くくれるとする。このような方法に従って、分析対象としたすべての住宅論を検討した結果、建築の「動向(状況)」「平面(プランニング)」「表現(デザイン)」「設計態度・方針」「概念」「空間」「部分」「建築家の役割」「居住者」「家族制度」「住居形式」「生活方式」「都市」「住宅状況」「社会状況」「伝統」「芸術」「生産方法」「構法・技術」「材料」「性能」といったカテゴリー項目が設定できた。つぎに、そのようにして設定したカテゴリー項目を、より上位でくくる概念であるカテゴリー分野によってまとめた。たとえば、建築の「動向(状況)」「平

表-2 住宅論のカテゴリー分析表

論文番号	年次	カテゴリー分野	カテゴリー項目										論文作品題目	著者名	論文内容による区分
			動向(状況)	平面(プランニング)	表現(デザイン)	設計態度・方針	概念	空間	部分	建築家の役割	居住者	家族制度			
no1	1946 01	A											新日本の住宅建設	西山邦三	A
no2	1947 05												住宅復興の方向	堀井健一	
no3	1947 05												日本の工場生産住宅に就いて	斎藤祐典	
no4													超立住宅試案	中村登一	
no5													超立鉄筋コンクリート住宅	田辺平孝	
no6													住宅の大量生産方式	十和田三郎	
no7													工場製住宅の展望	飯塚五郎郎	
no8	1948 01	B											新住宅の建て方方法	秀島 乾	B
no9													婦人開放と住宅形式	岡部孝彦	
no10													工場生産住宅の促進	斎藤祐典	
no11	1952 05												平面について	清家 清	
no12	1953 01												図式による住宅組織の分析	池田 隆	
no13													日本における住宅計画の原理	フナコ・トシキ	
no14													住宅建築について	今和次郎	
no15		C											住宅計画における民族的伝統と国民的課題	西山邦三	C
no16	1954 01												戦後住宅計画における積極性	稲田尚之	
no17													台所の組織と位置一住宅	明石信彦	
no18													住居デザインにおけるコアの意義	池田 隆	
no19	1955 06												和風建築と現代のデザイン	池田 隆	
no20													住居住宅への反省	広瀬謙二	
no21													快楽主義への検討とたたかう	池田 隆	
no22	1956 09	D											住宅平面に現れる家族像	浜口隆一	D
no23													大衆に好まれる住宅平面について	幸川文夫	
no24													住まいにおけるコンクリートの意味	池田 隆	
no25	1957 02												戦後とモダンリビング	西山邦三	
no26	1958 09												生活と家について	武藤 重	
no27													日本の風土の中から	藤原一男	
no28													住宅設計についてのメモ(2)	佐々木安	
no29		E											住宅設計についてのメモ(3)	佐々木安	E
no30													住宅空間の型	西山邦三	
no31	1959 03												住宅の将来像	西山邦三	
no32	1960 01												二連戸住居に関連して	谷口昌治	
no33													住宅論	藤原一男	
no34													住宅平面の面積企画	清家 清	
no35													生活空間の新しい視点を求めて	藤原一男	
no36	1961 01	F											類型化した現代住宅の計画のために	高矢 登	F
no37													住宅は建築である	藤原一男	
no38	1962 03												コートハウス論	西沢文雄	
no39													維持性について	清家 清	
no40													建築の性能評価法一住宅	小本智定	
no41	1963 06												建築空間のための覚悟	藤原一男	
no42													3つの空間	藤原一男	
no43	1964 04	G											1965年のための仮説	藤原一男	G
no44	1965 01												自由な空間をつくりたい	清家 清	
no45													住まいといふもの	西沢文雄	
no46													住まいーその心の世界	天野太郎	
no47													個人住宅を設計する価値	近藤正一	
no48	1966 01												住まいのつくり	清家 清	
no49													住居をつくり住居を使う、……	池田 隆	
no50		H											住宅における伝統のおもひ	池田 隆	H
no51													プランニングにおける思想性	山口文雄	
no52													空間と意識の構造	藤原一男	
no53	1967 01												住宅論	藤原一男	
no54													現代の理想住宅	西山邦三	
no55													住宅設計の新しい作法	大村清彦	
no56	1968 01												住まいはここに暮らすことができるか	宮内 康	
no57		I											住宅産業を考える	池田 隆	I
no58	1969 11												「住宅産業論」なにかで、……	藤井正一郎	
no59													住宅産業を受けとめる	井口洋佑	
no60	1970 02												住宅産業の成立とその理念	藤井 登	
no61													ア・マサ「住宅産業」デスカ	工藤正一	
no62	07												住宅産業にとって建築家は必要なのか	近藤正一	
no63													「住宅産業」に期待できることできないこと	藤原一男	
no64	08	J											部分としての住宅産業	藤原一男	J
no65	09												住宅は叫ぶ／文章	神代一男	
no66													開放空間を求めて	藤原一男	
no67	1971 01												住宅論「個と集合のための空間論」	藤原一男	
no68	1972 02												反技術の観点としての住宅を	村松貞次郎	
no69													住宅デザインの課題	西山邦三	
no70													人間社会における皮膚について	西沢文雄	
no71	1973 07	K											住宅設計の現場から	宮内 康	K
no72	1974 08												住宅の精神と批評	藤原一男	
no73	1975 02												都市環境と住宅空間の連続	石山雄武	
no74	03												現代住宅の保守的側面	石山雄武	
no75	1976 02												第3の極限	藤原一男	
no76	1977 01												開拓への展望	山下和正	
no77	08												住宅作法の今日の状況	太田雄信	
no78	1978 02	L											集合住宅を考へ	水谷道郎	L
no79													「住宅の時代」の終わりに	高矢 登	
no80	08												形式としての住居	山本理雄	
no81													どこにどんな風に住むか	吉岡隆生	
no82	09												これからの住宅の質について	内井裕蔵	
no83	10												住むこと、建てること、そして「建築すること」	藤原一男	
no84	12												建築での象徴作用とその図式	坂本一敏	
no85	1979 06	M											昭和の面、昭和の住宅	高山美華	M
no86	1980 06												覆いに描かれた「記憶の家」と「今日を刻む家」	坂本一敏	
no87													商品化住宅の模範化の中で	石山雄武	
no88													使用者をつくり育てる	奥 孝光	
no89	1981 04												市民が住宅の主体になること	内井裕蔵	
no90													儀式としての空間	藤原一男	
no91													所有対象としての住宅を超えて	坂本一敏	
no92		N											沈黙の表現	藤井正一郎	N
no93													ある台地から別の台地への渡り	北川源雄	
no94													個と全体との関係の追求	宮内 康	
no95													機能制約面としての人間関係とその容認	山本理雄	
no96													「時をたてさせること」ができるか	清田武信	
no97													閉じつつ開く	布野雄司	
no98	08												建築へ	藤原一男	
no99	09	O											近代市民幻想	宮内 康	O
no100	1982 05												住居形式考一近代住居批判	山本理雄	
no101	11												木造建築の現状と将来	内田洋敏	
no102	1983 08												木造建築の可能性と革新	水谷道郎	
no103													タワシハウスの現状と可能性	水谷道郎	
no104	1984 02														

表-2注 いくつかの異なる内容で構成された論文で、そのうちのひとつの内容が複数のカテゴリーにわたる場合は、それらをひとつのまとまりと考えて実線で結んだ。

面(プランニング))などは【建築】¹¹⁾の問題として、[建築家の役割][居住者]などは広い意味で【社会】の問題として、そして[生産方法][構法]などは【生産技術】の問題としてそれぞれとらえられる。なお、[都市][住宅状況][社会状況]および[伝統][芸術]は、それぞれ【社会】の中での「環境」¹²⁾および「文化」としてまとめられる。このようにして設定できたカテゴリ項目、およびカテゴリ分野を論文内容の要約の例とともに表一に示し、また、個々の住宅論ごとに、それぞれ該当するカテゴリを発表順にプロットした(表一2)。

この表から、【建築】では、建築界における住宅作品のあり方あるいは考え方の現状について言及している[動向(状況)]や、建築家の住宅設計に対する態度、あるいは方針に言及している[設計態度・方針]などの内容が多く語られており、また【社会】では、[都市][住宅状況][社会状況]といった「環境」的な内容が比較的多く語られていることなどを見ることができる。

2.2 住宅論の内容の分析—通時的考察

ここで建築家の住宅に対する状況認識の推移を見るために、各住宅論ごとにその内容がどのような上述したカテゴリに立脚しているかを、表一2より通時的に検討すると、住宅論の内容をここでの範囲で大枠四つの時期として読み取れると仮定できる。表中ではそれらの時期を、区分A, B, C, Dとして示している¹²⁾。

戦後から40年代後半まで(A)は、【社会】での[都市][住宅状況][社会状況]といった「環境」的な問題と、【生産技術】での[生産方法]によって多くの住宅論が語られている。また、ここでは【社会】での「文化」的な問題、および【建築】に立脚した論はほとんど見あたらない。このように、(A)ではいくつか特定のカテゴリでほとんどの住宅論が語られているのに対して、

50年代初頭から60年代中頃まで(B)では、【建築】での[動向(状況)]を中心に【社会】【生産技術】なども含めて多くの住宅論がさまざまなカテゴリで語られている。また特に他の時期に比べて、[伝統][芸術]など【社会】における「文化」的な問題に多く触れていることもわかる。

一方、60年代中頃から70年代後半まで(C)は、【社会】での「環境」、【生産技術】での[生産方法]、そして【建築】での[動向(状況)][設計態度・方針][表現(デザイン)]など特定のカテゴリで多くの住宅論が語られているのに対して、70年代後半以降(D)では、【建築】全般および「文化」を除いた【社会】全般で幅広い内容で住宅論が語られているのがわかる。

以上、建築家の住宅論がどのような内容で語られているのか、およびそれらの推移を大枠四つの状況として考察した。それらは、いくつか特定の内容について語られる時期(A・C)と、広くさまざまな内容を取り上げて語られる時期(B・D)とが交互となり、前者に共通して特定される内容として、【社会】での「環境」と【生産技術】での[生産方法]とがみられた。

3. 建築家の住宅観

本章および次章では、前章でみたそれぞれの住宅論のなかで、建築家の具体的な住宅に対する主張と考えられる箇所を建築家の住宅観⁶⁾として抽出し、その内容を前章での結果である論文内容の変化を含めて検討する。本章ではまず、抽出された個々の住宅観に、どのような個別の内容が含まれているかをみると同時に、後述する《機能》《状態》《意味》¹¹⁾といった住宅観が語られる「性格」的水準¹³⁾を設定した考察を行う。

3.1 建築家の言説における住宅観

表一3 住宅観の例文と分析の例

性格	住宅観の例文	事柄	意味内容 ()内は論文番号と作者名
機能	<ul style="list-style-type: none"> ■住宅は生活の容器であるから、・・・ ■住居の目的は、・・・。生活を破壊するような外力からの逃避である。 ■住居というものは、仕事から解放されて、心をも身体をもくつろがしてくれる場所だから・・・ ■・・・家は人間の生活を成り立たせる支えであり、生活の中心となるコアである。 ■住宅はその住む人々によって自由に駆使されるべき道具でもあり、・・・ ■人間と周囲の環境を制御するシェルター、および得られた環境を調整すべき装置。 ■都市は住宅と住宅から抽出された機能より成り立っている。 	<ul style="list-style-type: none"> <生活(生活)><空間(覆い)> <空間(覆い)><社会(社会)> <生活(その他)><場(場)> <生活(生活)><人間(人間)><場(その他)> <居住者(家族)><物> <人間><空間(覆い)><社会(社会)> <社会(都市)><物> 	<ul style="list-style-type: none"> 「覆う(生活の容器)」(9-1 園部喜彦) 「社会・覆う(生活)」(11-1 清水清) 「社会・覆う(休息の場)」(14-2 今和次郎) 「支える」(26-2 武藤章) (41-1 小本哲定) (62-2 工藤晴正) (90-3 内井昭蔵)
状態	<ul style="list-style-type: none"> ■住宅は人間生活の上に成り立つのであるから。 ■将来の都市像を構想するにあたって、これに密接なつながりをもっている重要な要素は将来の住宅像である。 ■住まいというものは、住む人のその必要とする要素が結び付いて全体を形づくるのである。 ■家というのは、自然や風土はもちろん供給できる材料や社会、家族の構造というようなものが大きく左右するから、それぞれの国でそれぞれの住宅が異なっているのはあたりまえだ。 ■外部からイメージして行くのは形勢です。住宅はそういうものではなくて、内側から生活空間を綿密に分析して、そこからふくらみあがってできるものではないでしょうか。 ■家は家族が相ともに住み生きていくところであるから、そこで人間は伸び伸びと育たねばならない。 ■建築家にとって住宅の設計はほとんど興味深い対象だ。それは生活者、施主としての人間との直接の対話によって設計が進められるからだ。 	<ul style="list-style-type: none"> <生活(生活)><人間> <社会(都市)> <居住者(個人)> <居住者(家族)><材料・技術> <社会(社会)(自然)> <生活(生活)><空間(空間)> <生活(その他)><居住者(家族)> <場(場)> <居住者(個人)><建築家> 	<ul style="list-style-type: none"> 「人間生活」(2-2 福井裕一) 「都市・社会」(32-1 西山卯三) 「居住者」(37-3 高矢晋) 「居住者・社会」(40-1 清水清) 「人間生活」(52-1 山口文象) 「居住者・人間生活」(71-1 西沢文隆) 「居住者・設計者」(91-1 黒川紀章)
意味	<ul style="list-style-type: none"> ■住宅にとりかかるときには心を開くのは、表現の方法よりも、それはその人の生活です。 ■住宅そのものを建築家の仕事の全体と考えていいのではない。住宅を考えることのできない建築家は建築家ではない。 ■住宅という空間は、今日の人間のさまざまな感情の動きとさらに深くかわるることによってのみその存在が保証される。 ■あらゆる建築の原型として住宅がある。 ■本来、私は建築と住宅が本質的に違うといったことなど考えてみたこともない。 ■<住まう器>ではなく、単なる物体=オブジェといえる。もう少しみたくて何かのエージェントであり、メディアであり、舞台装置であるといえる。 	<ul style="list-style-type: none"> <生活(生活)><建築家> <建築家> <人間><空間(空間)> <その他> <その他> <表現・手段><物> <社会(社会)(文化)> 	<ul style="list-style-type: none"> 「設計態度」(51-1 堀口捨己) 「住宅の特殊性(建築の根本性)」(52-2 山口文象) 「人間の精神」(54-1 藤原一男) 「住宅の特殊性(建築の根本性)」(72-1 宮脇檀) 「住宅の非特殊性」(93-1 藤井博巳) 「社会性(社会現象)」(94-2 北川原道)

表—4 住宅観のカテゴリー分析表

論文番号 本文内容による区分	カテゴリー 項目	性 格									
		機 能	状 態	意 味	生 活	居 住 者	人 間	建 築 家	空 間	場	社 会
A	48 no1	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	no2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	no8	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	no9	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	52 no11	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	no12	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	no13	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	no14	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	no15	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	no21	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
B	no24	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	no26	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	no29	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	no31	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	no32	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	60 no35	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	no36	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	no37	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	no38	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	no39	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
C	no40	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	no41	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	65 no45	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	no46	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	no47	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	no48	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	no49	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	no50	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	no51	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	no52	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
D	no53	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	no54	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	no56	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	no58	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	no59	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	70 no60	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	no61	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	no62	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	no63	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	no66	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
E	no67	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	no68	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	no69	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	no70	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	no71	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	no73	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	75 no73	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	no78	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	no79	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	no80	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
F	no81	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	no83	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	no84	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	no85	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	80 no87	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	no89	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	no90	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	no91	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	no92	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	no93	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
G	no94	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	no95	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	no96	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	no97	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	no98	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	no100	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	no101	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

抽出された住宅観⁶⁾を通覧すると、そこで語られている内容はさまざまであるが、ここでは、そのような具体的な意味内容をみる前に、まず住宅をどのように語って

表—5 [性格] 別カテゴリー分析表

機能	状態	意味	性 格									
			機 能	状 態	意 味	生 活	居 住 者	人 間	建 築 家	空 間	場	社 会
A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M

いるかを検討した。たとえば「住宅は生活のシェルターだ」という住宅観は、そこで語られている意味内容にかかわらず、住宅を何か役にたつもの、つまり具体的に機能するものと考えていると思われる。また「住宅は自然の一部だ」という住宅観は、住宅の理想的な状態あるいはその成立条件や根拠が表現されていると思われる。そして「住宅は文明批評だ」といったものは、社会的な価値であるとか建築家の観念などが強く投影された住宅観と考えることができる。そこでそれらをそれぞれ《機能》としての住宅観、《状態》としての住宅観、《意味》としての住宅観、という[性格]的水準¹³⁾と呼べるカテゴリーとしてここでは設定した。つぎに、各住宅観にどのような個別の内容（ここでは以下それらを[事柄]とする）が含まれているかを検討することから、《生活》《居住者》《人間》¹¹⁾など表—4の[事柄]に示したいいくつかのカテゴリーが設定できた¹⁴⁾。それらを住宅観の例文とともに表—3に示した。

このような方法に従って、抽出されたすべての住宅観を分析し、発表順に示したのが表—4である。これよりまず《機能》《状態》《意味》という[性格]的水準についてみると、戦後から60年代中頃までは、《機能》としての住宅観が比較的多くみられるものの、その後は次第に《状態》そして《意味》が多くみられるようになる。つぎに[事柄]については、戦後から60年代中頃まで《生活》が何らかのかたちで多くの住宅観で語られているものの、その後は一部を除いてあまり触れられない。人にかかわる[事柄]（居住者・人間・建築家）のなかでは、具体的に「住む」という内容を含んだ《居住者》と、より抽象的な概念である《人間》が、50年代後半以降交互に多く語られる傾向がみられる。また、建築的な[事柄]と思われる《空間》《場》は双方とも全体的によく語られており、特に60年代中頃までに《空間》《覆い》

を多くみることができる。〈表現・手段〉〈物〉は建築が社会的状況のなかで獲得したとでもいえる〔事柄〕で、80年以降に比較的多くみられる。そして〈社会〉は、50年代初頭から60年代中頃までは〈社会（社会）〉が、70年代後半以降は〈社会（文化）〉が、それぞれ多く語られているのがわかる。

3.2 住宅論の内容と住宅観

ここで前章でみられた論文内容の変化と前節で考察した住宅観の〔事柄〕のカテゴリーの通時的な傾向との対応関係を検討すると、戦後から60年代中頃まで（AおよびB）において〈生活〉が多いなど、それぞれの時期に対応する〔事柄〕の傾向は断片的にはみられるものの、その総体として、住宅論の内容による各区分に対応した住宅観のカテゴリーの明確な傾向は見だし難い。しかし、60年代後半（BからC）と70年代後半（CからD）で論文内容が推移する時期においては、〔性格〕におけ

る《意味》としての住宅観が比較的多くみられ、特に前者では、〈建築家〉〈空間（空間）〉など特定の〔事柄〕で住宅観が語られていることがわかる。

つぎに、《機能》《状態》《意味》という各々の〔性格〕において、どのような〔事柄〕がみられるかを検討するために、各〔性格〕ごとにそこで扱われる〔事柄〕を示した（表一五）。これより、《機能》としての住宅観は、全体的に〈生活〉〈空間（覆い）〉〈社会（社会）〉で多くが語られているものの、70年前後（B後半からC）に〈人間〉を集中的にみることができる。《状態》としての住宅観では、特に明確な傾向はみられないが、比較的〈居住者〉が多いことがわかる。これらに対して《意味》としての住宅観では、70年代中頃（C後半）までは主に〈建築家〉〈空間（空間）〉など数少ない特定の〔事柄〕で語られているものの、それ以降（D）は、〈社会（文化）〉を中心として多くの〔事柄〕がひとつの住宅観で同時に

図-2 注
各々具体的な住宅観の下に数字は資料とした論文番号で、その後の記号は論文内容による区分である。さらに、論文内容の推移時にかかわる住宅観には、論文番号の前に下表のような記号を付けた。また、通時的な傾向が読み取れる箇所には、矢印(→)を付けた。

区分Bと区分Cの推移時	☆
区分Cと区分Dの推移時	★

図-2 住宅観の意味内容の関係図

語られているなどの通時的傾向がみられる。

以上、建築家の住宅論における住宅観を、《機能》《状態》《意味》という〔性格〕的水準と、どのような内容が含まれているかという〔事柄〕のカテゴリーにより考察した。そのことから、〔性格〕では《機能》としての住宅観から《状態》そして《意味》へと住宅観の〔性格〕的水準が推移してきたこと、同時に〔事柄〕においては戦後から60年代中頃まで《生活》が多く語られていること、その他本章で述べたような通時的な傾向がみられた。また前章でみられた論文内容が変化する時期には、《意味》としての住宅観がかかわること、そして《意味》は《機能》《状態》と比較して、現代に近づくにつれて次第にさまざまな〔事柄〕で語られるようになることなどがわかった。

4. 建築家の住宅観の意味—住宅観の具体的な意味内容

ここでは、建築家の住宅論の中で具体的に表れてくる住宅観⁶⁾の意味をより包括的に考察するために、前章で設定した《機能》《状態》《意味》という〔性格〕的水準を前提として、個々の住宅観の意味内容を検討する。まず、抽出されたすべての住宅観について、その内容を各〔性格〕的水準ごとにKJ法⁷⁾に基づいて分類整理した¹⁵⁾(図—2)。この図から、さまざまな住宅観の意味内容をいくつかのまとまりとしてとらえることができる(それらを例文とともに表—3に示している)。以下それらを各〔性格〕ごとに考察し、さらに全体を通した検討を行う。

4.1 《機能》としての住宅観

《機能》としての住宅観は『覆う』『支える』¹¹⁾という役割が『社会』とかかわるものとして全体をとらえることができる。それらのなかで最も中心的なのは、生活を『覆う』ということによる「生活の容器」¹¹⁾といった住宅観であり(8-1, 9-1, 11-2, 14-1, 37-2, 67-1, 83-3)¹⁶⁾、それらに具体的な「住み手」という内容が加わったものとして「家族を収容する場」「家族を拘束する道具」などの住宅観がみられる(45-2, 81-1, 96-1)。そしてさらに「収容する」「拘束する」といった居住者が受動的な立場に置かれたものでなく、積極的に能動的立場をとったものとして「家族によって自由に駆使されるべき道具」などがみられる(41-1)。また、「外力」あるいは「仕事」といった『社会』的な物事から人間を『覆う』もの、とするのが『シェルター』(11-1, 21-1, 26-1, 35-2, 39-2, 45-1, 63-1)、『休息の場』(14-2, 31-2, 39-1, 71-2)としての住宅観である。『シェルター』での「環境に対する守備」といった内容が、より積極的に『社会』と対応したものとして「人間と環境とを調整すべき装置」など『環境』との関係を主張する住宅観があり(50-1, 62-2)、さらに、住宅をより積極的に建築外の領域に参

加したものととらえようとするのが「都市形成のための機能」といった住宅観である(90-3)。一方、「生活の本拠」「人間生活を支えるもの」という内容が『社会』と対応したものとして「社会生活のための基盤」をみることができる(83-1)。また単に、『支え』ているだけでなく「人間を形成する」といった役割が加わったものとして『人間の良心の再生産の場』という住宅観もみられる(46-1)。

4.2 《状態》としての住宅観

《状態》としての住宅観は、人間に具体的な「住む」という内容が含まれた『居住者』と、『人間生活』『設計者』の立場、そして『社会』などがかわるものとして全体をとらえることができる。ここで中心的なのは「住み手によってつくられるもの」といった『居住者』とのかわりを根幹に据えた住宅観で(31-1, 37-3, 49-1, 60-1, 83-4)、これに『設計者』という内容が加わると「住み手と設計者が交わる唯一の機会」などの住宅観が(70-2, 89-1, 91-1)、また単に「住み手によってつくられる」というよりもそこに『人間生活』が含まれたものとして「家族が住み生きていくところ」などの住宅観をみることができる(71-1)。『居住者』とかかわる住宅観のなかで、「住み手によってつくられる」といった内容がより積極的に表されたものとして「文化のもつ文脈であり生活者の感性の表現」(91-2)「個人や家族の身体的な表現」(90-2)などがある。また、『社会』とかかわるものとしては「都市との関連より考えられるもの」(32-1, 83-2)、「自然の一部」(13-1, 26-3)などがみられる。

4.3 《意味》としての住宅観

《意味》としての住宅観は、住宅を他の建築から特別視する『住宅の特殊性』、建築家の住宅に対する創作意志が色濃く投影された『設計態度』、そして何らかの社会的意味を含んだ『社会性』などの意味内容で大枠とえられる。また、それらとはやや独立して人間とのかかわりを深く掘り下げた『人間の精神』としての住宅観などもみることができる。『住宅の特殊性』の中でその中心となるのは、「住宅は建築の原型だ」(50-3, 58-2, 62-3, 70-3, 72-1, 73-1, 80-1)、「住宅はいつでも建築家の仕事の出発点だ」(52-2, 53-1, 56-1, 98-1)といった建築への基本的な問いという面も含まれる『建築の根本性』としての住宅観であり、それらに社会的な批評性(『社会性』)が加わったものとして「住宅は文明批評だ」などがある(38-1, 38-2)。また同じ『社会性』とかかわるものでも、それらとは対照的に建築家の住宅に対する思い入れを排除し、社会のなかでの住宅の置かれた状況(『社会現象』)をとらえたものとして「住宅はさまざまな記号を発生させるもの」などをみることができる(66-1, 85-2, 92-2, 94-2)。『設計態度』とかかわる住宅観としては、「住宅設計では最初の衝動がすべてを決

定する」「住宅は内部空間で発想しなければならない」など、住宅を設計する際のある意味で特殊とも思われる建築家の内面の問題がみられる(51-1, 54-2, 54-3, 79-1)。『人間の精神』とかかわる住宅観は住宅の存在と人間とを強く対峙させているもので、たとえば「住宅は人間のさまざまな感情の動きとさらに深くかかわるもの」などは、住宅を人間との対応関係としてとらえようとするものであり(54-1, 97-1, 100-1)、また「住宅は人間の象徴化現象だ」などは、住宅を人間生活の中に潜んだ経験や記憶などを取り込んだ建物としてとらえているものと思われる(84-2, 85-1, 85-3, 92-1)。

これまで、《機能》《状態》《意味》という〔性格〕的水準ごとに考察を進めてきたが、ここでそれら全体を通した住宅観の意味の関係について一部触れる。まず、《機能》における『社会』と《状態》における『社会』が、「都市形成のための機能だ《機能》」(90-3)・「都市との関連より考えられるもの《状態》」(32-1, 61-2, 83-2)など「都市」という概念を共有しているのを見ることが出来る。また、《状態》における『設計者』と、《意味》における『設計態度』、たとえば《状態(設計者)》における「住み手と設計者が直接交わる唯一の機会」(89-1, 91-1)では住宅の成立する理想的状況を表現しているのに対して、《意味(設計態度)》における「住宅は住む人の生活を離れてはつukれない」(51-1)では建築家の住宅に対する強い創作的意志を見ることが出来るというように、前章で設定した住宅観の〔性格〕的水準によってその語られ方は異なるものの、ともに住宅設計と居住者との関係を住宅観としている点で共通している。

4.4 住宅論の内容と住宅観の意味

ここで、これまで検討してきた住宅観の意味内容についての考察を第二章でみられた論文内容の変化を考慮して検討する¹⁷⁾。まず、住宅観の意味内容の関係図(図-2)で通時的な傾向がいくつか読み取れる。たとえば、《機能》における「家族を収容する場(B)」→「家族を社会から遮断する場(C)」→「家族を社会から切断し揚棄する装置(D)」では、単に家族を『覆う』という機能からしだいに『社会』との対応をもち、住宅の機能が社会的環境を取り込んでいくのが読み取れる。また、《機能》における『社会』と、《状態》における『社会』が、『都市』という意味内容を共有していることは既に述べたが、そこでは、環境に対する意識が正反対の意味をもつ二つの住宅観—《機能》における「外力からの逃避・保護」という社会的環境を全く排除しようとする『シェルター』としての住宅観と、《状態》における「自然の一部」という住宅を外界と融合したものとして考えている住宅観—が、現代において『都市』という意味内容を共有していることがわかる。

つぎに、前章で論文内容が変化する時期には《意味》

としての住宅観が多くかかわるということを述べたが、それらについて注目すると¹⁷⁾、60年代後半(BからC)では「建築家の仕事の出発点」と『設計態度』としての住宅観に、70年代後半(CからD)では「建築の原型」としての住宅観にそれぞれ多くみられる。このことから、住宅論の内容が変化する時には《意味》における『建築の基本性』としての住宅観がかかわることがうかがわれる。また、さらに、《機能》《状態》《意味》という各〔性格〕ごとに意味内容のまとまりを検討することから、それぞれ中心的思想と思われた「生活の容器(機能)」「住み手によってつくられるもの(状態)」「建築の基本性(意味)」等の住宅観に注目すると、これらは大枠論文内容の推移による各区分を通して語られていることがわかる。このことから、上記の住宅観は、つねに建築家の住宅に対する主張の根拠を流れる住宅観と考えることができる。

以上、本章では建築家の住宅論にみられる住宅観の意味内容を、第二章で明らかにした論文内容の通時的傾向をもあわせて相対的に考察した。このことから、建築家によるさまざまな住宅観の意味内容のまとまりと、それらの関係をみることができた。なかでも特徴的な傾向として、「生活の容器」「住み手によってつくられる」「建築の基本性」などは論文内容の推移にかかわらず常に語られる住宅観であり、また同時に『建築の基本性』は、論文内容が変化する時期に多くかかわる住宅観でもあることをみることもできた。

5. むすび

本論は、建築家によって著される数多くの言説の中から、特に住宅論に注目し、現代において建築家が住宅をいかにとらえ、そして建築の思考の対象としてきたかをここでの範囲で求めようとするものであった。そのためにも、住宅論の内容の変化を建築家の住宅に対する状況認識として大枠とらえた。そしてそのことを前提として、それぞれの住宅論のなかで、具体的に建築家の住宅に対する観念的主張が表れていると思われる箇所を建築家の住宅観として抽出し、その意味内容をKJ法に基づいて分類整理することから、住宅観の意味の関係を求めた。これらを通して、さまざまな内容の住宅観があるなかで、その多くが時代状況とともに移り変わるものの、建築家の状況認識にかかわらず常に語られ、ある意味で建築家の根拠を流れているとも言える住宅観、あるいは状況認識の推移する時期に多く語られる住宅観など、その他にも本論で述べてきたようないくつかの特徴的あるいは基本的な住宅観を見いだした。このように、本論でみられた建築家による住宅観のいくつかの内容とその傾向は、ここでの資料範囲ではあるが、現代での建築家の住宅に対する思考の広がり(範囲)とその方向性を示すものと考えられる。

別表 住宅観リスト

(各住宅観に付けられた前の数字は住宅論の通し番号、後の数字は各住宅観の中での番号)

- 1-1 戦後日本の住宅建設は、・・・新しい日本文化を担う人々の住居として、又自身日本文化の表徴として、美しく、健やかなものとして創りだされねばならぬ。 西山卯三
- 1-2 住居がいわゆる生活の根拠をなす本拠であるという意味で・・・ 西山卯三
- 2-1 住宅と人間生活の基本的な関係を考えるならば・・・住宅とは、人間生活の本拠であって、我々にとってそこは、生存の場所であり、人間的な生活を営む場所であり、又我々の生活活動が支持せられていく場所である。 福井精一
- 2-2 住宅は人間生活の上に成り立つのであるから、住宅復興も当然生活復興の一部として理解されなければならない。 福井精一
- 8-1 新住宅は、その生活内容の容器として構成せられ・・・ 秀島 乾
- 9-1 住宅は生活の容器であるから一定の生活様式に対しては、それにふさわしい住宅形式が現れる。反対に、一定の住宅形式によって、生活様式の全部が規定されることはないが、生活様式に大きな影響を与え、ある場合は、生活様式のある種の重要な部分の遂行を全く不可能ならしめる物質的条件としてあらわれる。 岡部喜彦
- 11-1 生活には二つ目的がある。一つは主体を維持するための栄養或は、エネルギーの摂取で、他の一つは、生体を破壊するような外力からの逃避である。住居の目的は主として、生活の目的のうち後者に属する逃避を目的としていると考えてよい。 清家 清
- 11-2 ...その生活の容器である住居は・・・ 清家 清
- 12-1 ...住宅建築などの人間を対象とする建築では、・・・ 池辺 陽
- 13-1 住居は、その建築される場所と不可分の関係にあり、その一部分なのである。 アントニン・レイモンド
- 14-1 住宅は、我々の生活を容れる器であり、同時に又、物的技術によって建築されるものである。 今和次郎
- 14-2 住居というものは、仕事から解放されて、心も身体をもくつろがしてくれ場所だから・・・ 今和次郎
- 15-1 私は、日本の最も代表的な建築、最も日本的なものは、都会では木造の借家住宅で在ると思う。これは、あらゆる意味で、つまり、その数において、日本人の生活に密着しているという点で、また、過去の建築技術のさまざまな遺産を最も現代的に集積継承しているという意味で、更に今日問題となっている住宅問題の焦点として、それは現代日本の集約的表現、つまり、最も「日本的」なものだといえよう。 西山卯三
- 15-2 住宅は、元来生活のための手段である。 西山卯三
- 21-1 雨が降れば獣も小鳥も樹陰に隠れて、それをしのごうとする。又、多くの動物は、その子を育てるために、又、外敵から身を守り、風雨をしのぐために巣を造る。人間でも初期においてこの形は恐らく動物と全く変わらないものであったろう。 池辺 陽
- 21-2 住居は生きるためのものでなければならず、それに何等のものを付け加える必要はない。 池辺 陽
- 24-1 ...建築を発生的に考えるとき、シェルターとしての意味こそ最も根本的なものであり、(現代の発展した技術の上にプランニングやエレベーションから解放されたシェルターを追求していくことは、長い建築の歴史の中で、現代の最も重要なテーマであろう。) 池辺 陽
- 24-2 住居は、すべての人の生活を支えるものである・・・ 池辺 陽
- 24-3 ...新しいものを生み出すのに最もよい場所である。近代建築の始まりのときに住居建築の果たした進歩的役割は周知のことからである。 池辺 陽
- 26-1 人々に対して家が果たす根本的な機能は、シェルターの役割である。このシェルターは、単に物理的な機能を持つだけでなく、精神的なシェルターでもある。巨大で気まぐれな自然の中にあって、人間は何かの依りどころを必要とする。その必要を満たすものが家である。 武藤 章
- 26-2 ...家は人間の生活を依りかからせる支えであり、生活の中心となるコアである。 武藤 章
- 26-3 ...家は自然の一部だ。 武藤 章
- 26-4 ...家という言葉の与えるイメージは、至極庶民的なものである。それこそ、彩りや明暗のある生活が営まれるにふさわしい場所である。 武藤 章
- 29-1 住宅というものは建築的な規模こそあまり大きくはないが、人間の生活の基本的な問題と常に関係する、要素が多いために、建築の工学的技術だけでは設計は不可能だろう。 佐々木宏
- 31-1 住居は、住宅と住み手との関わりあいの仕方ともいえる。西山卯三
- 31-2 住宅は単に外界に対するシェルターではなく「性生活の容器である」といったような極端な表現にもみられるような<プライバシーの箱>という機能を持つ。いかに開放されても、その中に開放されない核がある。・・・どこかの段階で公に対する私の一線が形成されていなければならない。 西山卯三
- 32-1 将来の都市像を構想するにあたって、これに密接な結びつきを持っている重要な要素は、将来の住宅像である。 西山卯三
- 35-1 ...住宅は面積が小さいからといって、内容は人生の容器として、複雑を極め・・・ 清家 清
- 35-2 住宅について筆者はきわめて動物的な意味での生活の二つの大きな目的として、1)生体を維持するための栄養、あるいは、エネルギー源の摂取・疲労の回復、2)生体を破壊するような外力からの逃避を考えている。 清家 清
- 36-1 ...この起伏の多い人間生活の空間を、 篠原一男
- 37-1 ...住宅という人間を入れる容器が・・・ 高矢 晋
- 37-2 もともと、住まいというものは、人がその中で働き、子供を育て、楽しみ、語り合い、やすみ、あるときは泣き叫び、あるときは喜び合う場所なのである。そこには、命ある個々の人間の生存する自然の姿がある。・・・自然の姿を容れる器が、・・・ 高矢 晋
- 37-3 住まいというものは、住む人々のその必要とする要素が結びついて、全体を形づくるのであって、規制された枠の分割ではないと思う。高矢 晋
- 37-4 住まいというものは、建物の空間と自然の空間とがかさなり合い、絡み合って、初めて、存在する物ではなからうか。 高矢 晋
- 38-1 住宅は芸術だ。 篠原一男
- 38-2 住宅は文明批評だ。 篠原一男
- 39-1 住まいは、個人の本当の憩いの場であるべきである。 西沢文隆
- 39-2 ...外界から完全に遮断され自然にあふれたプライベートな、住空間こそ、人間の住まいでなければならない。 西沢文隆
- 40-1 家というのは自然や風土はもちろん、供給できる材料や社会・家族の構造というようなものが大きく左右するから、それぞれの国でそれぞれの住宅が異なっているのはあたりまえだ。 清家 清
- 41-1 住宅はその住む人々によって自由に駆使されるべき道具でもあり、またその性能のいかんによって、生活のリズムが定められたり制約されたりする。そういう場合がはるかに、他の建物よりも顕著な意味がある。 小曽定彰
- 41-2 他の建物が往々にして単なる”場”であつたりするのに比べて、住宅は、最も生々と活用されている、或は、されねばならない建物である。 小曽定彰
- 45-1 住宅というのは、生活のシェルターだということくらいのことしかいえないだろう。住宅は生活のシェルターである。この定義は、まず住宅の定義としては正しい。 清家 清
- 45-2 住宅が家族を収容する場であるとなれば、家族形態の変化が同時に、住宅の改革をもたらすことは当然だ。 清家 清
- 46-1 住宅それはよくいわれるように人間の良心を再生産させる場であるとともに、人間から人間形成にあずかるスペースである。 西沢文隆
- 47-1 住まいは、ホームに一枚の屋根をかけたものといっていよう。 天野太郎
- 48-1 住宅は、単一の目的をもった建築と違ってアミューバーのように、核をもたえず流動している。これを建築家が、ある時点で、それを静的に把えて再整備し、図面化するわけだ。 近藤正一
- 49-1 家は母性がつくるのだと思う。建物をつくる金をどこかで儲けてつくるのは父親だろうが、家の全体を形づくる主役は母親であり、 清家 清
- 49-2 家づくりは、建築することだけではない。家というのは、先祖を含めての家族のつながりでもある。 清家 清
- 50-1 住居は、人間と自然とのネットワークの中における、一つのコントロールジョイントであると考えることができ。 池辺 陽
- 50-2 住居は、個人が構成するものであり、個人と個人の接点として家族がある。 池辺 陽
- 50-3 住居は空間の始まりであり、人間生活の時の刻みは、住居とともに始まっている。だから、それゆえ、住居は、人間にとって常に新たな問題であり、無限の創造の泉である。住居は、人間の空間と時間を支える基礎である。 池辺 陽
- 51-1 ばくが住宅に取りかかるとき一番関心を持つのは、表現の方法よりも、それは、その人の生活です。生活を離れてはできないですからね。 堀口捨己
- 52-1 外部からイメージしてくるのは彫刻ですからね。住宅はそういうものではなくて、内側から生活空間を精密に分析して、そこからふくらみあがってくるものではないでしょうか。 山口文象
- 52-2 住宅そのものを、建築家の仕事の全体として考えていいのではないのでしょうか。住宅を考えることのできない建築家は、建築家ではない。 山口文象
- 53-1 独立住宅の設計は今後いかなる社会にあっても、建築家にとって、意義あるそして魅力ある仕事だということを今一度も疑ったことはない。 篠原一男
- 54-1 住宅という空間は、今日の人間のさまざまな感情の動きと、さらに深く関わることによってのみ、その存在が保証される。 篠原一男
- 54-2 どのような形で最初に何をつかみ取るかで、すべての勝敗が決定されるような住宅は小さな空間である。つまり、住宅設計は、最初の衝動が全てを決定するという性格を持つ。 篠原一男
- 54-3 住宅は、内部の空間でまず発想されなければならない。 篠原一男
- 56-1 住宅は、常に全ての建築家にとってあらゆる問題の出発点であらなければならない。 太田隆信
- 58-1 住宅は人間生活を直接支えるものであり・・・ 池辺 陽
- 58-2 他の建築と比べて、住宅は本来人間と共にあったものであり、住宅の含むすべての機能は、他の施設をもって変えることができる。 池辺 陽
- 59-1 「住宅」とは、社会学者、経済学者、都市計画家、人類学者、地理学者、哲学者、技術者、建築家といったひとたちの有機的な協力体制の下での研究対象として取り上げられるべきものである。 藤井正一郎
- 60-1 住宅を冷淡に突き離してみれば、住む人の満足のえられるものであればよく、建築家がいかに批判する家に住もうとも、住む人の勝手であるというプライベートな側面を持っている。 井口 洋
- 61-1 都市、住宅は、恐らく人類はじめてつくりだしたもっとも高度な、ハードウェアであり、また最後までかかって完成しようとする最高のソフトウェア(利用技術)だろう。 藤井 登
- 61-2 ...都市、住宅という人間生活と、関連機能の高度な結集、藤井 登
- 62-1 ...人間の器である住宅が、・・・ 工藤晴正
- 62-2 ...人間と、その周囲の環境を制御するシェルター、および得られた環境を調整すべき装置、 工藤晴正
- 62-3 住宅は建築の原型であり、あらゆる多岐な要素の複合であり、工藤晴正
- 63-1 1戸の住宅そのものは、人間の生活を守る側のものであり、しかもたえず相対的に環境という問題に関わっているため、攻撃的でない守備側の性格をもっている。 近藤正一

- 66-1 住宅建築は、ファッションであるとか、あるいは、ファッション・アーキテクチャという新しい言葉で、自己の立場を説明することになる。 神代雄一郎
- 67-1 ……住宅などという日常生活の容れもの、…… 篠原一男
- 67-2 人間との直接の対応をしなければならない空間としての住宅は、…… 篠原一男
- 67-3 住宅の設計というのは、この小さな空間の中で、世界を相手にして闘う、たたかい方なのであり、それとは切り離された架構法や、材料の選定法の技術ではないのだからと思う。 篠原一男
- 68-1 住宅は小さな空間である。住宅のような小さな空間架構では、篠原一男
- 69-1 住宅というものは、われわれがもっとも広範囲にしかも多角的にモノに接する場、と規定できよう。(モノとしての住宅を、……) 村松貞次郎
- 69-2 住宅は申すまでもなく、受けての市民の最大の建築体験の場である。 村松貞次郎
- 69-3 住宅という複雑なファクターを内蔵するものである、…… 村松貞次郎
- 70-1 激化してくる建築家の生存競争の中で、住宅は、もっとも手ごろな売り出しのアドバルーンである。 西山卯三
- 70-2 住宅デザインにとりくむ場合に考えておかねばならないことは、住宅が最終的には、住み手によって作られるということである。ハウスは建築家がつくるがホームは住み手がつくるという人もいる。すぐれた住宅デザインは、住み手との協力なしにはできない。ハウスづくりはホームづくりとむすびついていなければならない。 西山卯三
- 70-3 住宅は建築の最も基本的・基幹的な部分であり、…… 西山卯三
- 71-1 家は、家族が相ともに住み生きて行くところであるから、 西沢文隆
- 71-2 人は家庭に帰ると、社会における正面性をかなぐり捨て、根本的な自分に立ち帰るのであるから、個にとって家は非常に重要なものだ。 西沢文隆
- 71-3 家は本来家族を社会から遮断し、家族だけの孤島をつくる場である。 西沢文隆
- 72-1 住宅の出来ない奴に他の建築が出来る筈がない。またあらゆる建築の原型として住宅がある。 宮脇 壺
- 73-1 住宅もやはり建築空間なのだ。 武藤 章
- 78-1 住宅をつくることは、建築計画の出発点です。住宅で鍛えるということは、コンペで鍛えることと対をなしているのです。 太田隆信
- 79-1 住まいの設計で重要なことは、多分これに住むだろう家族のもろもろの要求事項を満足させることに集中することである。 水谷 介
- 80-1 住宅は近代建築の華であった。……近代建築の華、それは、住宅であり住居であった。 黒沢 隆
- 80-2 住宅が住宅であり得るのは、建築家自身が住宅と思って住宅をつくらうとしているからにはならない。 黒沢 隆
- 81-1 住居は家族としての集団を拘束する道具だとしてある。 山本理顕
- 83-1 社会生活の基盤である住宅 内井昭蔵
- 83-2 住宅は単独に機能するわけではなく、当然、土地、都市施設など公共的なストラクチャーと共に考えねばならない。 内井昭蔵
- 83-3 住宅は多様な価値観や、生活を容れるものでなくてはならず、内井昭蔵
- 83-4 〈住宅は〉個人的ものである。 内井昭蔵
- 84-1 住宅が〈住むこと〉に関わる内容であることに、意義を唱える者はあるまい。 坂本一成
- 84-2 <人の住まう場>は、肉体の物理的な場であるとともに、精神の抽象的な概念の場である。 坂本一成
- 85-1 住宅を建築として位置付ければ、つまり、人間の象徴化現象とそれを認めれば、当然、今述べた近代建築の状況、そして現代の状況から、さらに、その認識から離れるわけにはいかない。 坂本一成
- 85-2 私たちの「住まう場」は、物理的な物質の配置によって、はじめて成立する。……そのことで、建築は、ビジュアルな構成を持たざるを得なくなるわけだ。……社会が形成されている限り、ビジュアルな形態は、仮に日常的使用を前提としても、それはさまざまな記号を発生させる。住宅や建築は、単に使用するもの以上の「人の住まう場」自身であることから、さまざまな水準で、またさまざまな領域の内で構成され、また、考え、捉えることができる。 坂本一成
- 85-3 住宅に「住んでいる」ということは、生物としての肉体が生きていると同時に思考する精神が生きている場にいることだ。 坂本一成
- 87-1 <人が住まう>空間を、あるいは、場を、私たちは家と呼んできています。それゆえ、その家を内包する、覆いが初源的な意味において、建築であり、その家を、覆いの外側に認めることが、建築のかたちを見ることだ。 坂本一成
- 89-1 ……設計者と使用者が直接交わることのできる、ほとんど唯一の機会である住宅設計に、…… 東 考光
- 90-1 建築家にとって、住宅は常に主題でなければならない。なぜなら、住宅はあらゆる建築の根源であり…… 内井昭蔵
- 90-2 住宅は、本来そこに住む人がつくのがあたりまえである。……基本的には住宅は、施主の生活信条・価値観といった個人や家族の身体的な表現であるべきだ。 内井昭蔵
- 90-3 都市は住宅と住宅から抽出された機能より成りたっている。 内井昭蔵
- 91-1 建築家にとって、住宅の設計は、まことに興味の深い対象だ。それは、生活者、施主としての人間との、直接の対話によって設計が進められるということだろうと思う。 黒川紀章
- 91-2 本来住宅に様式があるとすれば、それは、その国の文化そのものをもつ文脈であるはずで、住宅に個性があるとすれば、それは、生活者の個性的な感性の表現だと思う。 黒川紀章
- 92-1 <住宅>は、人が住まうために獲得した空間に、ある濃密な意味を、あてがうことによって、その人自身と一体化(身体化)した空間的環境である。 坂本一成
- 92-2 <住宅>は、(<空間>であり、)<物>である。 坂本一成
- 93-1 ……かつてどこかの雑誌で、「住宅は、本質的に建築とは異なるものである……」といったようなことが書いてあったが、私はこうした考えには基本的に承服しかねる。……機能的にも心理的にも十分なものがあって、そして、そこに住み得るならば、我々は、バルテノンやパラディオによるロトンダやバラツォといった建築をなぜ住宅と呼んではいけないのか。本来、私は建築と住宅とが本質的に違うということなど考えてみたこともない。……住宅を考えることは、私にとっては、建築を考えることと同じなのだ。 藤井博巳
- 94-1 住宅が他の建築物と区別される物的証拠は、もはや何もない。人が住んでいれば、どんな建築でさえも住宅なのだ。だから、ここで住宅建築に限っていうのは、いささかひかかるのだが。 北川原温
- 94-2 ……<住まう器>ではなく、単なる物体=オブジェといえる。もう少しひかみくだと、何かのエージェントであり、メディアであり、舞台装置であるといえる。 北川原温
- 95-1 住宅は、宇宙と人類を論じる場であり、歴史と技術に思いを馳せる場であり、ゲシュタルト心理学と民族学と社会学の成果がぶつかりあう場であり、創造性と現実と夢と経済とが火花を散らし合う建築設計そのものの場であった。 宮脇 壺
- 96-1 ……個人すら機能的断片として考察しておく必要があるということなのである。そして、それを機能的断片として指示し、固定し、維持する装置あるいは道具だてが、容器としての、住宅なのだ、……山本理顕
- 97-1 住宅にとって不可欠な要素のひとつは、住み手が、「ここは私の場所だ」と感じることでないか。……住宅には勿論機能的、生理的な快適さも必要だが、それ以上に必要なのはこの感覚であろう。この感覚を欠いたら、いくら快適であっても、住宅は成立しない。 渡辺武信
- 98-1 住宅の問題や設計は、建築家にとって基本的な問題であり、きわめて、具体的に、つくり手と受け手の関係の問題、表現と技術の問題、都市と建築の問題など互いに関連した問題を突きつけるがゆえに、これまでのさまざまな主張の少なくとも差異を明らかにする上で、絶好のテーマであるといつてよい。 布野修司
- 100-1 住宅が当然同時代的な観念の部分とその表層上に多く持つとしても、基本的には「住む」という言葉でいわざるを得ない本能というべき人間の行為を正面から受け止めねばならない存在であり、しかも、その本能は全人類共通の動物的本能と、地域や文化、歴史など時間の産物としての伝承的な本能とに分かれている…… 宮脇 壺
- 101-1 (ある個人にとって)社会的関係と、血縁を軸とした、家族という関係とは互いに他を疎外する関係としてある。このふたつの関係を切断し、揚棄するもっとも重要な道具だて、それが住居である。 山本理顕

注

- 1) L. コルビュジェ, F.L. ライト, L. カーンら, 近代の巨匠の作家論の一部として言説を取り上げ、論じているものなど。近年の代表的な論文として、前田忠直: Louis I. Kahnの思惟に於ける光の意味, 日本建築学会計画系論文報告集, 第377号, 1987年7月, 呉谷充利: ル・コルビュジェにおけるル・モデュロール身体相貌・ル・コルビュジェの空間における色彩と身体存在, 日本建築学会計画系論文報告集, 第381号, 1987年11月, などがある。
- 2) ヴィトルヴィウス, パラディオ, アルベルティらによる歴史的建築書の言説を対象とした研究, あるいは建築家による言説ではないが, 洋の東西を問わず歴史的文学書にみられる建築的言説を取り上げ、論じているものなど。近年の代表的な論文として, 石川康介: セルリオの建築書第1書における「ポルタの確定法」について, 日本建築学会計画系論文報告集, 第407号, 1990年1月, 相川

浩: ヴィトルヴィウスとアルベルティの建築造形に関する主要概念, 日本建築学会論文報告集, 第318号, 昭和57年8月などがある。

- 3) 本論文では, 特定の建築家の言説の意味を, その文脈に即して追求することではなく, 多数の建築家の言説との関係の内に, その意味を汲み取るという立場をとっている。それゆえ, 具体的な分析に際して, 同一の論者による複数の言説は, すべて個別の資料サンプルとして取り扱っている。
- 4) ここで言う建築家とは, 主に建築作品あるいは建築論をジャーナリズムに発表することによって, 建築の表現活動としている建築の設計者を指している。
- 5) 本論文において住宅論とは, 建築論のなかでその内容の中心が住宅にかかわる論考か, あるいは, その背景として住宅の問題が据えられている論考を指している。本報では, 資料とした「新建築」において, 基本的に巻頭論文的位置付けのある約1010の論文の中から104の住宅

- 論を見いだすことができた。なお、それらの住宅論のリストを表-2に示している。
- 6) 本論文において住宅観とは、住宅論のなかで「住宅は…である」、「…というものが住宅だ」などの表現で、住宅、住居、家、住まい、など居住を前提とした建物に対する建築家の主張あるいは観念が具体的に現れているフレーズを指している。本報では、分析対象として取り上げた104の住宅論に対して本論で述べているような検討を行った結果、67の論文で117の住宅観がみられた。なお、抽出したすべての住宅観を別表に示している。
 - 7) KJ法とは、民族地理学の分野で川喜田二郎氏によって考案されたものとしてよく知られており、何らかの問題提起から状況把握、そしてそれに対する解決方法の実施検証のプロセスまでの一連の方法を言う。ここでは、上記の中で、ある問題をめぐって関係のありそうな情報を集め、定性的データとし、意味の分かるような全体像とするまでのプロセスを狭義でのKJ法としている。川喜田二郎：KJ法、発想法、続発想法（中央公論社）
 - 8) ここでは、現代の建築ジャーナリズムの中から最も代表的と思われるものの一つとして、「新建築」を資料としている。「新建築」は1925年に創刊し、終戦時の休刊1年を除いて現在まで継続的に発行されている。本誌は、「…最初、住宅雑誌として出発し、のちに広く建築全般を扱う雑誌となった…」(横山 正：昭和住宅史、新建築者刊)。また、その編集方針は、必ずしも明確に記述することはできないものの、「…建築という分野における学問、芸術の意義、価値を信じ、出版という創作をもって記録にとどめ、…」(吉田義男：新建築1974年、10月臨時増刊、日本近代建築史再考／虚構の崩壊、および新建築1991、1月6月臨時増刊、建築20世紀1、2)などの言説がたびたび見られることから、建築作品あるいは建築論を長期的な視野での資料とし取り上げることに留意していることがうかがわれる。分析範囲に関しては、本報の現代の問題を扱うという姿勢から広く戦後(1946年以降)を現代と設定し、また住宅を独立したものとしてとらえるよりも広く一般的な建築との関係のなかでとらえるという視点に立っていることから、「新建築」が住宅のみ季刊誌として他の建築作品と分けて扱うようになる以前(1984年)までに区切っている。
 - 9) この資料を越えて、他雑誌あるいは書籍等を検討することで総合的に把握できると思われる。
 - 10) ここでの分析、および検討内容の一部は、奥山信一・坂本一成：「建築誌での住宅論に関する研究(1),(2),(3)」、日本建築学会大会学術講演梗概集、1989年10月、1990年10月、において報告している。
 - 11) 本報では、住宅論および住宅観の内容の分析により設定したカテゴリーに、下記のようなかっこを用いて対応している。
 - 【 】 住宅論におけるカテゴリー分野
 - || 住宅論におけるカテゴリー項目1水準
 - [] 住宅論におけるカテゴリー項目2水準
 - [] 住宅観における性格および事柄
 - < > 住宅観における【性格】のカテゴリー
 - < > 住宅観における【事柄】のカテゴリー
 - 「 」 住宅観における意味内容1水準
 - 「 」 住宅観における意味内容2水準
 - 12) 実際の状況は明確に一線で画するような推移というよりも、ある時間的な幅を介しての推移であると考えられる。ここでは、その範囲内において最も変化の読み取れるところで便宜的に区切り、考察を進めている。
 - 13) ここで設定している【性格】の水準とは、住宅観の具体的な意味内容にかかわらず、それがどのように語られているかということである。本論では、抽出されたすべての住宅観を検討した結果、大枠下記に示すような三つの語られ方がみられた。
 - 《機能》：住宅を何らかの役割としてとらえているもの
 - 《状態》：住宅の成立条件や根拠、あるいはそのあり方を表現しているもの
 - 《意味》：社会的な価値、あるいは建築家の観念などが強く投影されたもの
 なお、ここで設定された《機能》《状態》《意味》という住宅観の語られ方は、基本的にどのような住宅観にも程度の差こそあれみられるが、ここでは、その主調がどこにあるかによって、最終的に判断している。
 - 14) 〈生活〉：「生活」、あるいは「住まう」ということに関する具体的な記述
 〈居住者〉：「住み手」「生活者」「家族」など居住を前提とした人、あるいは人々に関する記述
 〈人間〉：「人間」「市民」「人類」など不特定多数の人々に関する記述
 〈建築家〉：「建築家」「設計者」、あるいは設計行為に関する記述
 〈空間〉：抽象的な空間に関する記述、あるいは生活、人間などを空間的に覆うということに関する記述
 〈場〉：「場」「場所」「ところ」など、生活等が成立している範囲に関する記述
 〈表現・手段〉：「表徴」「メディア」など、住宅を社会的な表現あるいは手段としてとらえている記述
 〈物〉：「道具」「装置」など、住宅を何らかの物的メタファーとしてとらえている記述
 〈社会〉：「風土」「宇宙」などの非人工的な条件や状況に関する〈自然〉、人工的な外部環境に関する〈都市〉、あるいは人間の精神的な活動や「日本的」「西洋的」など伝統的な問題に関する〈文化〉、といった住宅の外的な内容に関する記述
 - 15) 本来KJ法は、小さな意味単位を少しずつ包括していくことから、最終的に大きな意味のまとまりを見いだしていくものであるが、先に述べたように、ここで設定している【性格】の水準とは、具体的な意味内容にかかわらずそれがどのように語られているかということであって、住宅観のあるいは建築家のマニフェストの本質的な問題であるところでは考えている。そこで、そのことをより明確にするため、ここではまず各【性格】の水準ごとにKJ法を行い、最終的にそれらを全体化している。
 - 16) かっこ内の数字は、住宅観の通し番号を示す(別表 住宅観リスト参照)
 - 17) 図-2 参照

(1991年4月10日原稿受理、1991年8月12日採用決定)